『家族じまい』講評

選考委員代表 鹿島茂

桜木さん、おめでとうございます。

文学賞というのは、どんなに功なり名を遂げた作家でもうれいものだそうですが、たぶん、桜木さんにとっては特別にうれしかったのではないかと想像します。

なぜかといえば、桜木さんの小説はとても地味なのですが、同時に根源的な問いかけを有する小説だからです。この根源性に対してほぼ満票に近い評価が与えられたことがとてもうれしく感じられたのではないかと感じています。

実際、『家族じまい』は、どの短編の主人公も市井の平凡な人ですし、事件らしい事件もほとんど起こりません。北海道の小都市に暮らすいくつかの核家族の淡々とした日常が綴られているだけなのです。おそらく、書かれている桜木さんご自身も、果たしてこれで読者に喜んでもらえるだろうか、ときには気に病んでおられたのではないのでしょうか？ しかし、おそらく、桜木さんには、どうしても書いておかなければ死んでも死にきれないという強い動機があったにちがいません。

それは为什么呢？

家族とは何か、これを徹底的に考えてみたかったということなのです。

では、なにゆえに、家族について考える必要があると桜木さんは感じたのでしょうか？

それは、家族というものはだれにとつても一つしかないからです。いろいろと家族をたくさん体験して善し悪しを検討し、その中から最善の家族を選ぶという「選択の自由」が許されない究極の「選択不可」物件、つまり、きわめて理不尽な宿命にほかならないのです。それにもかかわらず、その宿命について突き詰めて考えた人が、すくなくとも日本にはあまりいないし、これまで家族を取り上げたどの小説もこの選択不可という理不尽な宿命を描いてはいないと思っただけにちがいません。

トルストイは『アンナ・カレーニナ』の冒頭で、「幸せな家族はみんなよく似ているが、不幸な家族はそれぞれぜんぶ違っている」というようなことを述べていたと記憶しますが、じつは、不幸な家族、幸せそうな家族に限らず、本当はどの家族もぜんぶ違っているし、それぞれが唯一無二の独自性を持っているのです。

そう、この世には同じ家族というものは一つもないのです。当たり前のようですが、考えてみれば、いささかも当たり前ではなく、なんだか恐ろしくなってくるような真実ではないでし

ようか？

桜木さんの『家族じまい』は、おそらく、この恐るべき「真実」の「発見」から演繹されています。

長い間、これが当たり前だと思い、他の家族も同じようなものだと思っていた人が、なにかのきっかけで、自分の家族は外見こそ他の家族とそっくりだが、実際にはまったく違うのだと悟り、にもかかわらず、その違いがどこから来て、なにをもたらしのかわからない。しかし、家族であるがゆえに、家族であることを止めることはできないという絶対矛盾。

『家族じまい』は、北海道の小さな都市で理髪店を営みながら満たされない野心に駆られて投機を繰り返す父親、新興宗教に嵌まって娘たちを連れ回した母親、そんな夫婦に育てられながら、まったく価値観の違った人間になってしまった二人の姉妹、そして、二人がそれぞれ結婚して形成した核家族。こうした数組の核家族を中心に据え、そこから派生するミニマムなドラマを Rond 形式でつないでいくかたちを取っていますが、家族人類学に凝っている私の目から見ますと、どの家族にも一つの際立った北海道の特徴があります。いわゆる直系家族、つまり、親・子・孫の三代が同じ屋根の下に住むというパターンの家族は一つも描かれていないことです。島崎藤村の『家』に登場するような三代の家族が濃密な空間で暮らすあの直系家族はまったく描かれていません。

各短編に取り上げられた家庭は、夫婦あるいは夫婦と子供だけの核家族です。これは本州にはない北海道の特徴なのです。

ところで、戦後、七五年、日本はアメリカから与えられた日本国憲法の家族条項を理想と仰ぎ、時代を駆け抜けてきましたが、それでも、私の感覚でいえば、日本の本土で核家族が主流となったのは団塊の世代以降ですから、ほぼ五〇年です。

これに対し、北海道では、その前から、つまり戦前から核家族が採用されているのです。日本の本土が核家族化したのは五〇年なら、北海道は一〇〇年、核家族でやっているのです。つまり、核家族にかなする限り、北海道は日本の中の先進国なのです。もっといえば、北海道は日本のアメリカなのです。

したがって、本土の人間にとって、桜木さんの『家族じまい』は、本土の五〇年先の未来を描いた SF 小説として読むこともできるし、その先行する五〇年分だけ、核家族が本土よりも重いものになっている歴史小説とも読むことができます。

では、日本国憲法に理想として描かれた核家族が北海道に本土に五〇年先駆けて誕生したのかといえば、どうも、そうではなかったようです。

本来なら、戦後のアメリカン・ホーム・ドラマに描かれたような、独立した人格を持ち、互いにその人格を認め合う男女が自由なる意思に基づいてつくりあげていく核家族が出来あが

っていいはずでした。

ところが、生まれたのは、かたじけなく核家族であっても、独立した人格とはとうてい言えない貧弱な個人がまるで互助会のように利益の相互供与だけで結ばれながら、家族を装っている寒い日本型核家族でした。そして、その日本型核家族の構造的矛盾の重圧は、家族の要である女性の肩にのしかかってきているのです。

しかし、困ったことに、だからといって、家族を止めることはできないのです。家族を止めずに、商店がシャツターを降ろして「店じまい」するように、とりあえず「家族じまい」することは不可能なのでしょうか？

この難問に対して、「家族とは何だろう？」という根源的な疑問を絶えず自分に投げかけながら答えを出そうと試みたのが、『家族じまい』という小説だと思えます。

桜木さんは、自分にあくまで忠実で、絶対に妥協しないという小説家倫理だけを頼りに、地味でありながら根源的な小説を書くという最難関の技に挑み、見事、これに成功したのです。

これからも、こうした小説家倫理を支えにして、傑作を書きつづけていただきたいと思えます。あらためて、おめでとうございます。

(令和二年十月十四日)